「感謝」

松永知海

ただいまご紹介を頂きました松永でございます。最終講義ということで、このような場をつくっていただきましたことに、まず感謝を申し上げたいと思います。

今、伊藤真宏学部長がご紹介くださいましたように、私は昭和四四年に佛教大学に入学いたしまして、本当にたくさんの先生方、先輩・同輩・後輩、また勤めてからは同僚の方々、また事務局の方々、特に今年はリモート授業で機器の操作など、大変お世話になりました。たくさんの方々に取り囲まれまして、こうした日を迎えることができたことは、本当に感謝にたえません。

最終講義といたしましては、配布いたしました資料にございますように、昨年度国際木版保存研究協議会という所が、第五回の国際学術大会を開きまして、その時の資料をお手元の資料として配布させていただきました。そこに至るお話をして、今日の最終講義に替えたいと思います。

今、田山先生のご講義を聞いて、私はなんて勉強してなかったんだろうと思いました。考えてみるととくにそう

いう思索という所ですね、形而上の問題ということを、私はずっと避けてきたような気がします。いつもなんか形而下の話で、具体的なものだけを見つめて、目録であるとか、索引であるとか、そういったものを作ってきたなというふうに改めて思いました。

学部・大学院の私の指導の先生は春日井真也先生というインド学の先生で、そういった点では田山先生と大変よく似て、思索的な、哲学的な論文を書いたりもされて、アビダルマ学も研究されておられた先生が私の指導教授でした。先生は浄土宗の僧侶でもあられたので、『阿弥陀経』『観経』『無量寿経』といった「浄土三部経」の研究でも業績を残された先生でした。そんな先生のもとで、学部時代は『阿弥陀経』を研究していました。学部では『阿弥陀経』で論文を書いたのですけれども、なぜ『阿弥陀経』を選んだかと言うと、実は三年次にチベット語の講義をされていた小玉大円先生が『阿弥陀経』の掲載されたテキストを使っておられた。それから香川孝雄先生が、サンスクリットの講義をされ、その梵語学の解説テキストに、やはりこれにも『阿弥陀経』が掲載されていました。それなら『阿弥陀経』で論文が書けそうだなと思ったのが大きな間違いで、私は外国語、横文字には全然才能がないな、というふうに思いました。なんとか書き上げましたけれども、大学院の修士時代は漢訳しかないものを選ぼうと思い、『観無量寿経』を選びました。『観無量寿経』で、なんとか論文を書き上げて、そして大学院博士課程に進みました。

大学院時代は、敦煌写経がマイクロフィルムで図書館に購入されて、目録もなく所蔵されておりましたので、その整理をして目録を作っておりました。暇に明かせて図書館でゴロゴロしておりました。博士課程の終わる頃に、当時浄土宗文献センターの主任をしておられました堀隆廣さんに「どうするの？」というふうに言われまして、「いや卒業後のことは何も考えてません」と告白しましたら、「アルバイトを雇う予定だ」と。それから『教化リサーチ』

という浄土宗文献センターが出す寺院向けの雑誌なんですが、「それの編集を手伝ってくれ」ということを言われまして、週四日ということでアルバイトをさせていただいたことが奉職のきっかけです。

その当時、浄土宗文献センターの隣の部屋に仏教文化研究所というのがございまして、そこの主事は後に学長になられる高橋弘次先生でいらっしゃいまして、その下に書記として岸一英先生がおられました。そこで佛教大学の図書館にある浄土宗関係の目録を作るから、「お前も手伝え」という話になりました。今だったらＯＰＡＣがありますけれども、当時の図書館はカードで整理されていました。そのカードをコピーするというところから始めました。それで図書館へ行ってそのカードからピックアップした浄土宗関係の典籍を実際に手に取って、そして必要事項を加除訂正して、本にするということをしました。岸先生には、その時にそうした目録の作り方・索引の作り方、そういったものを学びまして、「こういうことだったら、私にもなんとかできそうなところがあるなぁ」というふうに思ったのが、索引だとか目録を作り始めたきっかけになりました。この目録は最終的には『佛教大学図書館所蔵和漢書中浄土宗学関係書籍目録稿』（佛教大學仏教文化研究所、一九八〇年刊）ということで出版になりました。これについては、その当時、名古屋大学から来られました水谷真成先生という音韻学の碩学で、『大唐西域記』を平凡社から出版された先生も「これは岸目録だね。」と大変喜んでくださいました。

それと並行して先ほど言ったように『教化リサーチ』を出していたのですが、その時に史学科の今堀太逸先生から、法然院の経蔵の典籍調査の依頼をいただきました。

その調査を浄土宗文献センターが引き受けることになり、主任の三輪晴雄さんとともに今堀先生から紹介していただきました史学科の学生アルバイト四名と始めることになりました。その時は神戸大学教授の橋本峰雄先生が貫主でいらっしゃいました。その下、執事としてご子息の梶田真章現貫主さんがおられて、調査では大変お世話にな

りました。この目録は後に、浄土宗文献センターから発行されることになりました。その法然院の調査のカードもほぼ終わりかけた頃に、佛教大学には当時四つの研究所があったのですが、そのそれぞれに二年任期の研究員を置くということになりまして、歴史研究所には山本博子さん、仏教社会事業研究所には田宮仁さん、社会学研究所には高橋伸一さんがそれぞれ採用され、私も仏教文化究所に所属することになりました。

その時の研究所所長は坪井俊映先生で、主事は深貝慈孝先生でした。「とにかく論文を書け」と言われましたが、先ほどお話ししましたように、どうも私は形而上の問題は苦手でございまして、論文を書くとなると自分の研究課題をどういうふうにまとめていったらいいのか、よくわからないという状態でした。そこで、大蔵会五〇回分の目録をまとめた『大蔵会展観目録』というのが、当時文華堂書店から出版されていましたので、その索引を作ることにしました。大蔵会というのは京都仏教各宗学校連合会という所が母体となりまして、大正天皇のご即位の式典以降毎年一回秋に、それぞれの各宗派で秘蔵されている典籍を展観して、眼福に供するというような催しでした。当時、牧田諦亮先生が毎週大学院の授業で研究所に来られていまして、研究所にはこちらにいらっしゃる稲岡誓純先生もいらっしゃいました。そういった方や、受講生の大学院生の皆さんにも協力していただいて、その目録のカード作りをいたしました。若き日の中国文学科の鵜飼光昌先生もその時にいらっしゃったんですけれども、皆さまのお力をお借りして『展観目録』の列品の五十音索引だけでしたけれども、その時に出すことができました。後に佛教大学が大蔵会の開催校の時に、この索引に佛教大学の図書館から所蔵者別の目録をつけて、増補改訂版を刊行しました。ちょうど国枝利久先生が館長の時でした。

仏教文化研究所を離れた後、深貝先生から今出川の浄福寺の調査の依頼を受けることがありました。これには国文学科の学生さんのアルバイトを四人、後に六人になりましたがお願いをいたしまして、現在、非常勤講師でいらっ

しゃいます山路芳範先生にもお手伝いをいただき経蔵調査をいたしました。これは草稿本を作ったんですけれども、出版されることなく埋もれていたので、これをなんとか退職までに出版したいと思って、今、山路先生と力を合わせて、出版をしようという方向でやっている所です。

山路先生とは、平祐史先生が浄土宗文献センター所長の時に、また別の依頼を受けました。これは「矢吹慶輝さんの遺品があるんで、そのご子息である輝夫さんの弁護士事務所に行って遺品を頂いてくることになった。それの目録を作りなさい」ということで、その目録を作ることもいたしました。これは平成五年の時に作ったものです。これを基に非常勤講師の梶原隆浄先生と別府一道先生が改訂をいたしまして、増補出版したのが、『矢吹慶輝博士旧蔵遺品目録』として出版されたものです。

もう一度話を元に戻しますと、坪井先生が古稀を迎えられた時に記念論文集を作ることが企画されまして、深貝先生が主事で主に働かれ、書記の稲岡先生もおられ、そして私もお手伝いさせていただいたんですけれども、記念論文集ということで私も論文を一本書けと言われました。と言っても私も法然院の調査から離れていましたし、黄檗版大蔵経の課題というものは数年ではまとまらないというふうに思っておりまして、身動きが取れない中でなんか書かなきゃいけないと、ふっと思いついたのが、先ほど伊藤先生からご紹介をいただきましたように、黄檗宗と浄土宗のつながりというか、黄檗宗の第四代獨湛和尚という方と、法然院の中興二世の忍澂上人との交流でした。

当麻曼陀羅の話もありましたけれども、その獨湛という人は当麻曼陀羅にも著作がありまして、古代蓮を咲かせた大賀一郎博士が「黄檗四代念仏禅師獨湛和尚に就いて」という論文も書いてもおられました。そういう所からこの黄檗四代獨湛和尚のことについて何か資料がないかなと、飛び込みで黄檗山萬福寺に行きました。で、売店の方に「なんか黄檗宗の研究機関はありませんか？」とお聞きしましたところ「黄檗文化研究所というのがあるよ」と

教えていただきまして、そこで黄檗研究をされていた大槻幹郎先生を紹介していただきました。大槻先生からは、黄檗の宗務所内で行われていました『知客寮須知』という日鑑の輪読会に誘われました。そこで崩し字を勉強させていただいたわけです。またその延長上で、平成八年度に一年間研修を佛教大学からいただきまして、田中智誠禅師が主事の黄檗文化研究所に藉を置かせていただき、文化庁のご示教のもと宝蔵院ご住職の加藤弘宗禅師のご許可を得て、黄檗版大蔵経の版木調査を始めました。

その時には貝葉書院で黄檗版の版木の摺印をされている六人の摺師の方々がおられまして、その方々から摺印の仕方であるとか、あるいは仕込みであるとか、道具の名称だとか、いろいろな専門用語を直接に学ぶことができました。版木の中には文字に刷られていない部分や、江戸時代の摺師の人々が手慰みのために書いた墨書なども発見できて、大変有意義な研修をさせていただきました。お手元の資料にそうした墨書なども紹介させていただいております。後で見ていただけたら幸いでございます。

また話は前後しますけれども、この研修とほとんど同じぐらいなんですが、天海版一切経の調査というものも始めました。これは山科毘沙門堂や、粟田の青蓮院門跡や御室の仁和寺、また日蓮宗の本圀寺や天台宗の叡山文庫で調査をすることができました。歴史も伝統もあるご寺院の経蔵調査でしたけれども、そういう中ではかえって江戸時代の典籍というものは、あまり調査されておらず、ゆっくりと調査をさせていただきました。本当に至福の時間で、今から考えても、本当に幸せな時間でした。その成果は、『東叡山寛永寺天海版一切經目録』であるとか、『願文集』というような形で、刊行することができました。

天海版一切経は黄檗版よりも前に日本で最初に刊行された大蔵経で、その経帙、包み紙には天海版よりもさらに前に大蔵経の刊行を試みました宗存版という未完成の大蔵経の反故紙を使っていることを調査の中で見つけました。

これは従来知られていない経典でしたので、大変嬉しかったことを覚えております。

天海版一切経というのは、一枚の板に文字を彫って印刷する整版版木ではなくて、印鑑のように木片の一つに一字だけを彫って、そしてそれらをまとめて板のようにして印刷したものでありまして、現在この木活字が二十六万個あまり重要文化財とされております。そうした調査のご縁で水上文義先生から声をかけていただき、実践女子大学の渡辺守邦先生の科研費における助成研究の一員として参加することができました。これも『寛永寺蔵天海版木活字を中心とした出版文化財の調査・分類・保存に関する総合的研究』という本の中で報告することができました。

これよりまた少し遡るのですけれども、先ほどお話しました黄檗の大槻先生と、仏教史学会の発表で知り合いました梶浦晋先生と、現在は非常勤講師で学部時代に私のゼミ生でもありました馬場久幸先生とで、高松の法然寺に所蔵されています高麗版大蔵経の調査もさせていただきました。この調査は、法然寺の故細井俊明ご住職と大槻先生とが知己の間柄ということで始まった調査でありました。この時に大正大学の石上善應先生から、韓国の朴相國先生という高麗版大蔵経を研究されている方がいるので、その人を高松の法然寺に案内してもらえないか、ということで連絡をいただきました。朴先生は後に韓国の文化財庁の民族芸能室の室長をされました。これがご縁で後に佛教大学の宗教文化ミュージアムのシンポジウム「日本仏教と高麗版大蔵経」を開催することができました。またこのシンポジウムでは、他に富山大学の名誉教授で朝鮮典籍の第一人者である藤本幸夫先生、情報学研究所の永﨑研宣先生、京都大学の梶浦晋先生、そして先ほども申しました佛教大学から韓国の圓光大学で初めて博士号の学位を取った馬場久幸先生などの参加を得て、ちょうど高麗版大蔵経の初版ができてから一千年という記念の時に、そうしたシンポジウムをすることができました。またその時に梶田真章貫主の全面的なご協力を得て展観ができ、梶浦先生、馬場先生のご協力を得まして展観目録ができました。更に忍澂上人が苦労して、黄檗版大蔵経と建仁寺の

高麗版大蔵経とを対校した時に使った高麗版大蔵経の現在目録を、建仁寺のお許しを得て作成できたということは大変感慨深いものがありました。その時の館長は歴史学の門田誠一先生でした。また植村拓哉さんがミュージアムの学芸員でいらっしゃった時も大変お世話になりました。その他、宝蔵院の住谷瓜頂禅師には、「黄檗版の大蔵経の諸相」という展観をした時にもお世話になりました。その時に高井恭子さん、この方はもう亡くなられましたけれども、吉良上野介が華蔵寺という愛知県のお寺に寄進した黄檗版大蔵経の目録を作成した方ですが、高井さんにもお話をいただいたことがありました。「明の万暦版」の展観におきましては、知恩院や目黒の西蓮社、黒谷の青龍寺、大谷大学、花園大学、龍谷大学などのご協力を得て、諸本を比較展観もすることができました。

歴史学部の小野田俊蔵先生に館長が代わられてからは、韓国から高麗版大蔵経の摺師の方と彫師の方が二名と、日本からは宝蔵院で黄檗版大蔵経を摺印されている矢野俊行氏をお招きして、日韓摺印の実演をしていただいたこともありました。その時に黄檗版大蔵経作成の経緯と摺印とをまとめたＤＶＤを作成して私の教材としても使っていますが、本当に今年のリモートでは大変有意義なもので、作っておいてよかったなと思っています。

こうした宗教文化ミュージアムでのいろいろな展観・講演というものは、元々は中井真孝先生が学長の時に、アジア宗教文化情報研究所と言っていた頃に、いわゆる小泉改革があり行政改革の中で研究も箱物で助成するのではなくて、研究と一体となった新しい形の研究助成をしていくということになったので、その班に入ってみないかと声を掛けられたことに始まります。それならば、ということで私は『全藏漸請千字文朱點』簿二十三冊という黄檗版大蔵経の販売目録のようなものがあったものをいつの日か整理したい、と思っていたので、渡りに船とばかりに飛び乗りました。以前、白黒のマイクロフィルムで焼き付けておいたのですが、やはり解読するには白黒では読みにくい所もあったりして、カラースキャナで取り込むことにいたしました。この時には浄土学専攻の大学院生だっ

た渡辺剛嗣さんに、大変お世話になりました。

宝蔵院と貝葉書院の所蔵ということで、この朱點簿二十三冊をなんとかして整理していくわけですが、その時に画像処理という問題が出てきました。お手元の資料にありますように、朱点簿は「天地玄黄」から始まる『千字文』六九三字をあらかじめ二枚の紙に印刷しておいて、そしてその余白の第一ページの初めの所に、国名だとか地名だとか寺院名だとか個人名、そういったものを書いて、上部の余白には、納入年月日、帙数、巻数などを書いていく。そしてその上にたくさん用意しておいた朱印を一つ押して、さらに割り当てられている『千字文』のところに、上部に書いた年月日に押したものと同じ朱印を押す。これによって、いつ、どこの、誰に、どれだけの経本を配本したかということがわかる。そういった販売目録なんですが、江戸時代に押された朱印は、段々退色していって見にくくなっています。その退色した朱印の赤を強調して見やすくし、台紙の千字文の黒い色を薄くするようなことをしてもらえないか、という無茶な要望をその当時に平山郁夫美術館で学芸員をしておられた別府一道さんにお願いして、そういうソフトを開発していただきました。また集計ソフトも情報システム部を通じてＷＢＣに作って頂きました。そしてできましたのが、『「全藏漸請千字文朱點」による黄檗版大蔵経の流布の調査報告書』というものでした。

またミュージアムでは大蔵会の展観として、「近代の大蔵経と浄土宗―縮刷版から大正蔵経へ―」、「近代の大蔵経―宗典叢書と仏教辞典類の刊行―」というようなこともさせていただきました。これについては、総本山知恩院はじめ、唐津浄泰寺、大本山の知恩寺、小松谷の正林寺、そして福原隆善先生が学長の時に、佛教大学の図書館の蔵書になった個人蔵の黄檗版、こういったものを調査させていただきました。こういった調査の報告は一々挙げませんけれども、調査については未完の部分もありますので今後もそういったことを逐次報告させていただきたいと

いうふうに思っております。

以上話しましたように私の研究というのは形而下の問題であって、これがどうなってる、ああなっている、という現象を目で追ってそれで確かめる、というような地面を這いつくばってやるようなことをずっとしてきました。そういう点でいうと、つまり調査っていうのは一人でできないことはないんですけれども、そこを支えていただく大学院生であったり、あるいは事務の方々や、あるいは同僚、先輩の方々であるとか、そういったたくさんの方々の協力、必要な時に必要な方々が現れて、そして「こういうことはどうしたらいいんだろうか」と相談すると、それについて解決していただくというようなことが、ずっとこの大学に奉職してから続いて今日にいたりました。

この他、知恩院が所蔵する六三〇〇余枚の版木調査をさせていただいたこともありました。この調査では大学院生の皆さんと本当に汗まみれ、埃まみれになっていたわけですけれども、南宏信先生がその時にお手伝いいただいていたということを最近知りまして、本当にこれは頭が下がるような思いもいたしております。

それから善導大師の千三百年の御遠忌というものがありまして、藤堂恭俊先生がそれについて前から『善導大師研究』というような形で本をまとめたいと思っておられたようで、その数年前から奈良国立博物館の学芸員をしておられた河原由雄先生が非常勤講師で来られました。その時に紹介を受けて当麻曼陀羅のことについてはこの先生にお聞きして、いろいろ博物館とかにも行かせていただきました。この千三百年でもう一つ思い出があるのは、藤堂恭俊先生のご子息の藤堂祐亨さんと黒谷の西翁院というお寺の蔵を調べたことがありました。文雄さんという方が作られた『蓮門類聚経籍録』という浄土宗関係の目録があるのですが、その増訂版を書かれた天従さんが黒谷の西翁院に隠棲されていたということで、この関係資料がないかなということで行きました。そこで偶然なんですけれども、七枚の版木が出てきて、それを合わせると二メートルあまりの当麻曼陀羅になりました。これはこの西翁

院のご住職が、後々の千三百年の御遠忌にということで、その版木を摺印されて佛教大学図書館にもその刷られたものの一揃を寄贈下さったということもありました。

また韓国の関係で言いますと、並川孝儀教学部長のもと東国大学校との学術交流というものがありまして、高麗版大蔵経をテーマに、歴史学の貝秀幸先生と私と東国大学の二名の先生と四人で共同研究をすることになりました。これも国際交流課の吉田勝彦さんの大変なご助力によって『高麗大蔵経の研究』という本になりました。渡韓の時には海印寺の版木庫内を当時円光大学校に留学中の馬場久幸さんともども特別に見学させて頂いたこともありました。

あれやこれや書いたものの一つ一つにはきりがないほどの沢山の方々にご教授・ご協力を受けました。

こうしたリモートの中、いろいろと不自由な研究状態ではありますけれども、支えていただいた方々に感謝を申し上げます。そしてまたこうしてご参集いただいた皆様方に感謝を申し上げまして、私の最終講義を閉じたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

［最終講義について、仏教学部長伊藤真宏教授ならびに仏教学科長曽和義宏教授はじめ学科教員各位、また仏教学会幹事市川定敬准教授には大変お世話になりましたことに重ねて感謝申し上げます。］